

# わが町の動物たち

## 1 キタキツネ ハック物語



【指なし】

樹氷の森は巨大な氷の芸術だった。

凍<sup>しば</sup>れきったシベリア寒気団が居座ったまま、移動する気配すらなかった。

昭和五十一年の冬、北海道は記録的な寒波に見舞われ、くる日もくる日も真冬日が続いた。原野も森も動物も人も、自然の驚異の前には、ただ萎縮するほか術がなかった。

里山林道、<sup>にわやま</sup>爾波山の夕立の丘からは、鉢巻山、美唄山が、南北にくねる石狩川の西には、ピンネシリ山が秘かに居すまいを正していた。

「ダーン」冴えきった碧空に銃声が響いた。

天体の硝子戸を打ち砕くような透明音は、稜線の空間を断ちきって、樹氷の森深く吸いこまれていった。間もなく巨大な、一匹のキタキツネが斜面を<sup>ゆっくり</sup>悠然とした足どりで登っていった。時々曳光に振りかえり乍ら、さも何事もなかったかのようなその面構えは、憎い程の落ちつきをみせていた。逆八の字に吊り上がったその目は、猛々しい憎悪の光を放っていたが、下手くそな狩人に、その鼻先はケラケラと<sup>わら</sup>嗤っていた。

火薬の<sup>はじ</sup>弾ける音と匂いに、雄ギツネは、忘れかけていた<sup>いま</sup>忌いましい苦い体験を思い出していた。何年か前の或る雪の降る日に、森の中から開けた疎林に姿を現した時、樹間に人影を認めた。(多くの動物の習性として、相手の拳動と目を見るが、この犬科の動物もそうであった。)相手の目には、親愛の破片など少しも感じられなかった。人影は狩人だった。火を吹く黒光りの長い棒が点となり、目玉のような小さな輪に見えた時、裂けるような轟音が鳴った。

一瞬、頭上を<sup>かす</sup>掠める得体の知れない摩擦音に、本能の血が噴き出した。素早い動作は、彼の天性だった。<sup>まっしぐら</sup> 鷲進に<sup>いわくら</sup>岩窟の襞を駆け降り、辺りを伺ったが、狩人の気配はなく、追ってきたものは、硝煙という嫌な匂いだけだった。

彼は動転していた。足の痺れが激しい痛みに変って、全身を突き抜ける苦痛に、その目は更に細く吊り上がり、妖しい光を放ってきた。血潮をかぎつけたカラスの群れが騒ぎ出し、突っつきあい、追っかけ廻して、興奮の度をこしていったが、雄ギツネは、そんなことに気をまわす余裕など少しもなかった。

後肢の骨と、砕けた指は、舐めているうちに、ポロッと脱落<sup>おち</sup>て、指なしとなってしまった。舐めることが、最良の治療法であることを本能は知っていた。

血潮は、雪を真紅に染めていたが、やがて落ち着きを取り戻した彼は、凶暴化したカラス共に、必殺<sup>からて</sup>の空拳を振り、白い牙をつきたてた。この光景の一部始終を、樹上から他人<sup>ひと</sup>ごとのように高みの見物をしていたエゾリスは、日頃危険な目にあわされている、嫌な奴の敗北に、敵愾<sup>てきがいしん</sup>心の爪を研ぎ乍ら、頬<sup>ほ</sup>っぺたを脹<sup>ふく</sup>らまし、齧<sup>げっし</sup>歯の牙をキキと鳴らして嗤<sup>わら</sup>っていた。やがて黒い死神の集団盗賊たちは、鋌先をエゾリスに向けて、突っこんでいった。ただの傍観者であろうと、何だろうと、理屈など通用しない野生の掟は厳しかった。自然に生きるものは、種族維持の為に、他の犠牲の上で成り立っているのである。自然界の厳しい法則であった。

慌てたエゾリスは、身を躍らせて枝から枝へ、必死の逃亡を繰り返し乍ら、やっとの思いでトド松の葉陰に隠れ、樹<sup>こぶ</sup>の瘤に化けて動かなかった。上空で騒ぐカラスの位置で、狩人は傷を負った獣<sup>あ</sup>の在りかを知ったが、追跡しようとしなかった。無駄骨であることを承知していたのである。やがて雄ギツネは、血の跡を絶ち乍ら、いつもの棲家へ去ったが、敗者の姿は惨めであった。

小物どもはさすがに音もたてず、忌いませげに見送るだけだった。やがて森は静謐<sup>せいひつ</sup>をとり戻し、雪も降りやんで、明るい蒼空が、ひろがっていった。ひと際高い楡の木<sup>し</sup>の天辺でこの勝負の行司役でもあったハシブトカラスが、軍配の翼を揚げた時、「パッ」と羽毛が飛び散って、雑巾落としに雪の中に減<sup>め</sup>りこんだ。

下手くそが帰り際、自棄<sup>やけ</sup>っぱちに空へ放ったのであるが、八つ当たりとは黒星であった。

銃声が合図のように、風が出て小雪がちらつきだした。その後、雪の上に三本足で歩く狐の跡<sup>し</sup>が刻<sup>し</sup>るされるようになったが、それは梅の花紋のようで、巨大であった。

多くの狩人は、このキツネに的を絞って狙っていたが、賢い彼は、苦い経験を忘れることはなく、めったに姿を見せるようなことはなかった。そして不思議なことに、いつの間にか、三本足は忽然と消えてしまい、その行方は、誰にもわからなかった。

北国の春一番に咲く福寿草が、凍土の中で可憐な花を咲かせ、野路路<sup>ふき</sup>が、玉虫の黄色い蕾<sup>つぼみ</sup>をつけ、水芭蕉が顔を出すと、ヒグマが冬眠から目覚める。そして猫柳が乳房の膨らみをみせても、粗目雪<sup>ざらめ</sup>はなお深かった。

コブシの、白百合に似た大輪の花が開いて香水の香りを降らし、石狩川の上空を、北を指して白鳥の群れが渡る頃、ようやく春の感触を知るが、溪水はまだ冷たかった。

そして多くの動物達が新しい生命を得るのである。やがて、緑の絨毯<sup>じゅうたん</sup>を敷きつめた樹海に、春蝉<sup>せみ</sup>や小鳥など、森の音楽家たちのコーラスが、春の訪れを告げてくれる。

動物たちは美しい毛皮のコートを脱ぎ乍ら、其の後、夏毛に変わってゆくのである。

冷夏は北国に住む人々にとって凌ぎ<sup>しの</sup>やすいが、動物、植物、作物におよぼす影響は計り知れない。暑夏は四季の恵みであって、それぞれの生きものは、太陽の光に培われ、生命の僥倖<sup>ぎょうこう</sup>を得ているのである。秋の訪れは早く、盆を過ぎると肌寒い朝を呼び、郷愁の夕を迎える。限りなく続く黄金の稲穂のうねりに刈田をみいだす頃、野鴨の群れが渡ってゆく。やがて山塊は色彩<sup>いろ</sup>りどりの粧<sup>よそおい</sup>を凝らし、綾錦<sup>あやにしき</sup>に萌えだすが長続きせず、一雨毎に色褪<sup>あ</sup>せてゆき、やがて落葉の季節となる。

ボリボリ茸、ムキ茸、栗茸、舞茸、松茸、落葉茸などの他に、大粒の山ブドウ、コクワ、マタタビなどが、秋の味覚を添えてくれる。

そしてキタキツネ達の独立も近いが、学習せねばならない事柄も沢山ある。成長した体力の充実を図り、過酷な冬を迎える準備の為には、大切な季節である。

やがて短月の秋は、旅鳥と共に<sup>たちま</sup> 忍ち去ってゆき、再び長い冬の季節がめぐってくる。

降り続く雪は、根雪を思わせるように積り、三日目に蒼空がひらけていたが、山も丘も原野も、白い世界に変わっていた。

不思議にも、指なしの姿や跡さえも、雪の上に見出すことはできなかった。だが注意ぶかい狩人は、巨大な梅花紋の跡に、指のないものがあることを見逃がさなかった。

謎は解けたのである。去年のうちに疵は癒えて、指なしは健在であったのである。

そして逞<sup>たくま</sup>しい素晴らしく敏捷な体軀からは、勇気と知性が感じられ、褐色黄金の背毛は、白磁の雪櫛に梳<sup>す</sup>かれて、日毎に艶を増してゆき、気品ある風格さえ備わっていた。

指なしは、のちに森の貴公子として、野生に生きるものの王者として君臨していったのである。

## 【生いたち】

指なしは「ハック」であった。里山林道東側の廃坑の沢にある、桂の樹の根元に近い巣穴でハックは生まれた。父親はこの界隈のボス的存在であつたらしいが、ハック達が生まれるふた月も前に、見知らぬものによって狩られてしまった。母親カツラは気性の激しいキツネであつたが、子ども達をいたく可愛がり、他の家族には見られない程、教育熱心だった。そして狩りにかけては天性の素質をもっていた。二週間もすると子ども達は、巣穴の入口に出たり入ったり、そのうち巣穴の外で元気よく戯<sup>さ</sup>れ廻った。ハックには妹「チギラ」と「ライラ」がいたが、次第に妹たちを相手にして遊ぶ事にもの足りなさを感じてきた。雄ギツネらしい活発さと、カツラに似た激しい気性は、幼少の頃から芽生えていたのである。動くものに興味を示し、それを獲<sup>とら</sup>えることを覚えたのも、チギラやライラ達よりずっと早かった。別にカツラが教えたわけでもなかったが、そんなハックを母親カツラは優しい眼差しで見守っていた。

春の草花が咲き始める頃、いろいろな小動物や昆虫などが蠢<sup>しゅんどう</sup>動し始めた。カツラは子ども達の成長を見計らい乍ら、野生に生きてゆく為に不可欠な学習を始めた。喰べられるもの、危険なものの区別など、毎日の教育に多忙であつた。

黒っぽかった毛の塊も、いつの間にか、母親にそっくりとなり、なかでもハックの成長ぶりは母親の体重に迫っていた。学習は日課であり、生活であつた。

彼等はカツラの庇護のもとで、すでに野生に生きる<sup>す</sup>総べてを学んだ。毎日が楽しかった。

その行動範囲もだんだん広がってゆき、狩ることは生きることだと自然は教えてくれた。北国の春夏は短月のうちに過ぎて、秋もまた駆け足で去っていった。

ハック達家族の日々は、それは楽しいものであった。チギラやライラの目は燃えていた。そしてハックの輝くような瞳は、十字に太陽の光を宿していた。

昭和四十年頃、前後して北海道の炭鉱が閉山していった。奈井江町の炭鉱も例外ではなかった。四十八年に最後の炭山も終息した。人々は各地に散らばってゆき、取残されたものは炭<sup>たんじゅう</sup>住という廃屋と、人々の生活の残骸や、庭木や草花などのほか、猫や犬たちであった。自然の中へ<sup>ほう</sup>抛りだされた彼等は飢えた。

特に犬達は、遠い野生の本能に目覚めて、次第に狂暴化していった。

その行動には従順な家畜の面影などなく、野獣のそれであり、野兎や、エゾ雷鳥、雉子、鶏に至るまで、<sup>さつりく</sup>殺戮の牙を振った。町では野犬駆除を試みたが、結果もむなしく、目にみえてそれらの動物は減っていった。自然の生態系も大きく変化し、群盗と<sup>いえど</sup>雖も生きのびることはむずかしくなっていた。

だがこの界限に、黒くて胸の辺に白が混じる、年を経た犬を頭目とする五匹の群がいた。茶色、白、<sup>まだら</sup>斑<sup>ちすじ</sup>など血統は異なっていたが、<sup>まさ</sup>将に野獣そのものであった。

崖の上に横隊となって、空腹の<sup>かたまり</sup>塊となった五匹の雑種軍団が、醜悪の目を光らせて待ち構えていた。遠い距離にいたハック達の家族が、崖の下の崩れ落ちた、むくれた丘に、野ネズミを探しに近づいてきた。この丘はハック達の食餌の丘でもあった。ここに顔を出した野ネズミや、野兎達は、最早や自然の営みの犠牲者であった。

いつもの丘の気の<sup>ゆる</sup>弛みであろうか、賢い彼等にしても、高い辺りの警戒心には<sup>うと</sup>疎い弱点があった。(地上の動物に総て共通したもので、空の<sup>もうきん</sup>猛禽類からみれば隙だらけである)

風を巻いて砂礫が崩れた。土煙りの中に、黄色い牙が襲ってきた。カツラは一瞬、驚愕の目を据えたが、容易ならない事態を悟った。野獣どもは執拗なダニであったからである。ライラの警戒音が悲鳴に変わった。

カツラは猛然と野獣の群に立ち向かい、一転して沢筋を走った。彼等をおびき寄せる作戦であった。だがカツラは運命を悟っていた。一匹や二匹の犬どもなら、<sup>たちま</sup> 忍<sup>ま</sup>ち撒いて蹴散らす自信もあったのだが……。

ライラの声は絶<sup>たえ</sup>息<sup>え</sup>てしまい、チギラの絶叫を耳にした時、カツラの背後に黒い頭目を先頭にして、茶色い奴が迫っていった。

カツラの足は疾風<sup>はやて</sup>のように跳んだが、奴らはダニ犬特有の挟撃<sup>きょうげき</sup>を、波状的に繰り返した。

カツラは疲れてきた。今となっては撒くことより逃がれることが大事であったが、遂に大きい黒い奴に<sup>とも</sup>後腿<sup>こた</sup>を噛まれ、茶色が横あいから咽喉<sup>が</sup>を咬んだ。血圧が噴きだして、悲鳴<sup>こた</sup>が<sup>たま</sup>訝<sup>ま</sup>となって聞こえたが、すでにチギラやライラに聞こえはしなかった。咽喉<sup>の</sup>を裂かれ、腹<sup>の</sup>を割られて、なかは空<sup>から</sup>になっていた。

<sup>つるうめもどき</sup> 蔓梅擬の真赤な実が、彼女を慰めるかのように、サビタの木に絡まっていた。

そこは彼女が<sup>えら</sup>撰んだ死に場所ではなかったが、自然が供えてくれた野花であった。美しく賢かったカツラからは、再びあのコールを聞くことができなかった。森を逆撫でしたように、悲劇は終わった。

その時ハックは敢然と悪い奴らに立ち向かう決心をしたが、悪党どもに対してどうすることも出来なかった。

突然、ハックの後で至近距離から連発銃が唸った。仰天した彼が見たものは、見覚えある、火を吹く棒を持った、あの下手くそだった。

だが銃口は前方の悪党どもに向けられていて、狙いの方向が違っていることに気付いた。

気のせいかな下手くその瞳に、信愛の破片<sup>かけら</sup>を見たような気がした。ハックは吾れとわが目を疑ったが、下手くその口元に白い歯を見た時、やっと真実だと知った。

ハックは助けられたのである。銃弾はいつも悪い奴にとんでゆくのである。だが恐怖は消えなかった。ライラやチギラの絶叫を耳にした時、母の運命も知った。

<sup>りこう</sup> 伶俐なハックは、まっしぐらに、生まれた時の巢穴に向って突進していった。巢穴は崩れかけていたが、廃坑の沢は最も安全なかくれ家であることを母は教えていた。<sup>にわやま</sup> 爾和山に西陽が消えて夕闇が迫ってきた。

懐かしい巢穴は母の温もりどころか冷たかった。ライラやチギラも背を丸め

そばに居なかった。急に悲しさがこみあげてきて、母を呼び妹たちに叫んだが、暗闇に明るい光はとも燈らず、野ネズミの走る音を聞いても、僅かに耳を動かすだけだった。

山葡萄の実がかさこそと落果する、秋の終わりの出来ごとであった。

## 【復讐の牙】

二年の時が過ぎ去っていった。指なしハックはその頃、単純な若者ではなかった。巨大な体躯のうちに秘めた知性と豁達さは、その目の輝きにあらわれていた。そのテリトリー(縄張り)は、霊山八十八ヶ所の稜線を登り、遠くトンガリ山、鉢巻山、楠南の沢を経て、藤谷の沢から山口沢の稜線を爾波山に至るまでの、広大な地域を占めていた。

多くの牝キツネたちは、ハックの端正にして洒然とした貴公子ぶりに慕い寄ったが、彼はそ知らぬふりをしていた。他の牝キツネは隙あらばと狙っていたが、ハックの超然たる気魄に満ちた目の光に気圧されて、尾っぽを垂れた。

爾波山に満願の月が昇って夕闇を照らしたし、しっとり濡れた秋草のなかに、虫の声は途絶えて久しかった。

沖天に月が小さく見えだした時、夕立の丘の背後から黒い獣が姿を現わした。月明りにその肩の辺りは鬪魂の塊りのようにみえたが、その目は黄色い濁りのなかで、かすんでいた。そ奴は二年前のあの時の首領であった。

爾波山の天辺で身じろぎもせずに見ていたのは、ハックであった。黒い雑種に見覚えがあったのである。

彼はあの日の忘れることのできない事件を思い出した。母や妹を喰った憎むべき死神が目の前にきたのである。その時、母や妹達の悲鳴が聞こえたような気がした。

彼の全身に滾るものが沸きだして、次第に陰しさを募らせ、がっちり四脚を地につけて構えていた。

ここは彼の領域である。ヒグマを除いて、他者の跳梁を許すことはできなかった。

黒い奴は侵略者であり、森と原野の平和を乱す無法の凶獣であった。無法者はそこに巨大な褐色をみいだして一瞬戸惑ったが、老い耄れの目にはただの肉

塊としか映らなかった。

三角点の小旗がゆらめいて、秋草の露がとび散った。背毛を逆立てた黒い奴は、不用意にも襲いかかっていった。だが相手は、そんなことに慌てるどころか、軽く身を軀かわした。狐とみて侮ったところに誤算があったのである。互角の体重を持った二つの肉塊は、纏もつれ合い絡みあって秋草を地に染めていった。

初めて老い耄れの目に恐怖のかけがよぎったが、貪欲の牙は猛り狂った。ハックは復讐の夜叉と化した。巨大な独楽こまの唸りにも似た素早い動作には無駄も隙もなく、歴戦を勝ちとってきた気力をぶっつけていった。牙のかち合う鈍い音がして、憎い奴の厚い咽喉笛から黒い血が噴き出した。

老い耄れの数々の悪業は、ハックの前に終息した。森と原野に平和が甦よみがえった。

明るい天上をハックは凝然ぎょうぜんとしてみつめていたが、そこには母や妹たちの翳かげを宿して、まんまるい月が輝いていた。

町の灯りあかも消えようとしており、トンガリ山、鉢巻山、ペンケ山、美唄の山やピンネの森は、月明りに霞かすんでいた。

## 【その後】

ハックの王国にもまた冬がめぐってきた。潤葉樹林は、骨のような枝が風雪に堪え乍ら、音もなく影を落していた。遙か霊山の稜線を二匹のキツネが行くのを双眼鏡のレンズに捕えた白い装束の狩人は、それがハックだと解ったが、連れのキツネには思い当たるものがなかった。

「ハックの奴、恋人ができたな……」  
狩人は小声で呟つぶやいた。この二匹がどの辺りに降りてくるか、おおよその見当がついたが、先回りして待ち構えるようなことはしなかった。生命を救ったこともあり、彼だけは、山の友として、またこの界隈の王者として、敬愛すべき動物だという気持ちが、心のどこかにひそんでいた。

狩人は大きく咳払いしてみた。森閑とした狭間を隔てた稜線で、二匹はこちらを認めたらしく、その儘ままじっとみていた。こちらから手を何度も降って、

「幸せにな……達者でやれや……」と、声援を送った。ふと狩人は、恋人、いやその妻に名前を付けてやるべきだと考えた。



「レイラ」そうだ。「レイラ」いい名前だ。狩人は勝手に決めてしまった。

レンズの中の彼女は美しい小柄だが、ハックの妻に<sup>ふさわ</sup>相応しい気品のようなのが<sup>うかが</sup>窺われた。

「ハックよー、お前の妻はレイラだぞー。」

狩人は思わず叫んだ。名付け親となった喜びのような楽しさが、声となって冬空いっぱいに拡がっていった。

乳色の雪景色も、いつの間にか深い湖に似た色相を見せていた。此方の意思を感じ取ったのか、親しみを背にして歩き出した狩人をジッと見送るかのよう  
に、彼と彼女は、点となったまま動かなかった。

スキーはこちよ<sup>きし</sup>い軋みを響かせて、雪山を二つに割って快走していった。

狩人はあの手くそであった。そしてスキーも、その名がしめすとおりのものであった。その後ハックとレイラは、暖冬の平和な王国の中で充実した日々を送ったのである。やがて<sup>ふき</sup>踏が伸びきった頃には、何匹かの毛の塊が生まれていることであろう。

昭和五十五年は、異常な暖気のうちに明けた。一月二十一日の大寒を過ぎても雪が少なく、温暖な毎日だった。こんな冬は例年にないものであり、珍しいというほかなく、寒い冬という概念さえ忘れたかのように、日中ストーブを消す日もままあった。

異常気象は夏にも顕われ、全国的には明治三十八年以来、七十五年ぶりの記録的な冷夏だったと、気象庁から発表された。

北海道は、大正二年に次ぐ、六十七年ぶりの寒い夏となった。

## 【キツネのこと】

私達の奈井江町は、函館本線、札幌・旭川のほぼ中央に位置する、平和で住みよい町である。かつて石炭と稲作が基幹産業であったが、いつの間にか石炭は斜陽の坂を滑り落ちて消えてしまった。

その頃には原野も丘も、田圃の中まで、野ウサギの跡が無数にあった。関係ある役所では、野兎駆除に長い間、奨励金を出したりしたが、その功績は野生のキタキツネに負うところもかなり多かった。

キツネが異常に繁殖し出したのは、十年にも満たない以前からであった。そ

の繁殖は野ウサギの滅亡を早め、此の頃では、あの優雅な赤い目をしたエゾ雪ウサギの姿をみることは、ほとんどなくなった。その他、雉・エゾ雷鳥なども急速に減っていった。

キツネの殖えた原因の一つはそれであり、いま一つは、多くの家庭の台所から出される廃棄物である。毎日、塵芥捨場に集められる物の中には、彼等の好物が惜しげもなく投げ棄てられている。人々の生活が向上した豊かさのあらわれか否かは別としても、物を大切にするという何かが欠けているのを、そこに見いだすのである。塵芥捨場は、人々の<sup>おごり</sup>奢侈の捨場でもある。

昼間、山の中に姿を消していたキツネ達が、夜陰に<sup>まぎ</sup>紛れて<sup>おご</sup>驕りの餌にありつくわけで、<sup>い</sup>厳しい冬と<sup>え</sup>雖も、食餌に事欠かないのである。

町の条例にはないが、キツネ達は手厚い生活保護を受けているわけである。

道東、礼文島などは、エヒノコックス症の汚染地区に指定されている。人間の肝臓をおかす寄生虫による恐ろしいもので、死亡率の高い病気である。それが近くの夕張市からも発見されている。

野生のキツネは、媒介動物の第一にあげられている。キツネが殖えすぎると、この恐ろしい病気の発生を予測しない訳にはいかない。

一般に人々は、野生のキツネなど幻の動物と思いがちだが、キツネ達は実に人間と密着した生活をしているのである。

街の周辺の、家の軒下まで夜な夜な出没しているが、人々が気付かないだけである。雪の積った朝などは、その足跡が山深く続いている。一般の人は、キツネも犬コロの跡も見分けることができないが、此の頃では、人家の近くにある跡は、犬コロよりキツネの方が多い。例えば<sup>たいひ</sup>堆肥置場などには、彼等の好物が捨てられている。それを目当てに民家を訪問してくるのである。キツネ対策も、この辺で、じっくり考える必要があろう。

キツネは好奇心の強い動物であって、人にも慣れ易く、狸より伶俐で、物わかりもいいらしい。キツネは人を化かす、などと云われてきたが、人をたすけた昔咄も多いのである。そして、女に化けるのが得意らしい。そこにこの動物の<sup>ずる</sup>狡猾さがある。この“化ける”という昔咄が、キツネを嫌われ者の代表にしまったのだろうか。愛すべき動物なのに・・・

キツネはその昔、稻荷大明神の使いだったと云われる。また、神として扱っ

た地方も多い。神様なら、キツネそのものが、お稲荷様かもしれない。

関東地方の農家では、稲荷大明神を<sup>まつ</sup>っている家が多い。農産の神だから当然なのだが、キツネには、一種の畏敬のようなものをいただいていた。したがってキツネを狩る狩人も、ほとんどいなかった。理由はいろいろとあるが、時には神であり、或いは人を化かしたり、人に取り憑<sup>つ</sup>いたり、不可解なことがまことしやかに、子供や大人達の間でも真顔で信じられていたのである。当時は又、現在のように、毛皮の価値もなかったので、キツネとしては幸いであった。

彼等の蒐集癖には驚くべきものがある。或る雪の降った朝、住友炭鉱跡地にキツネの寝た様子があったが、そこにはどこから<sup>くわ</sup>えてきたのか、婦人用下着があった。彼?はそれを枕に一夜の夢をむさぼっていたのかもしれない。エッチな神様も、これでは神通力を失ってしまったことであろう。

キツネは食肉目、イヌ科の動物で、体長(鼻先から尾のつけ根)70-90センチ、体重7-10キロであり、尾の長さ30-40センチである。稀に驚く程の大物がいるが、めったにお目にかかることはできない。

北海道のものは本州産よりやや大きいようである。その分布は、野生動物大百科によると、アジアからヨーロッパ、北アメリカ、北アフリカなどであり、アカギツネというらしい。野生のキツネの寿命は、およそ八年といわれているが、餌となる小動物其の他、生息環境などに影響されることは確かと思われる。

